

余白の風 第175号 7

井上洋治神父の提唱による「南無アツバ」日本人のキリスト教信仰を生涯のための求道詩歌誌

井上洋治神父のうた

杯日 歌 讃美 歌

夕焼キ小焼キ日が暮ルキ

の 音 歌 イ

夕焼キ小焼キ日が暮ルキ

今日ウ一日 感謝シ

夕べウズ祈リ 捧げまじよ
角並ッ心ぞ

捧げまじよ

カラスも小鳥も 野ッ花も

ほくらと二橋にとたえまじよ

アツバ アツバ 南無アツバ

*神父様自ら 最終にして最高傑作 笑」と自負した替歌讃美歌。 エッセイ・童話・詩の総決算のよう。

会員作品とエッセイ（*主宰包評）

蓮田市 平田栄一
耳鳴りはこの日も止まず西方に浄土あらんと囁くように

石川れい子
その後の風の行方を思うなりアバミサ止みしその後の風

稲城市 時鳥古都虚子立子記念館

七変化胎児の顔をみる如し

菖蒲園明治の母もみてをりぬ

風のかたち

ヨット ヨット／ 風のかたちは 帆のかたち／みなとみらいの よこはまの／ シンボルビルは ヨットの帆／ 風のかたち」は 映画です／ 小児がんの 子らの声／夏のキャンプの 十年を／ 伊勢真一監督が 寄り添った／いのちの希望の 実話です／御神風さまは 聖霊です／ アツバアツバ 南無アツバ／唱えていると 天の父／ 私の内に 吹くのです

八王子市 井上文字
*と同時に、吹く風に促されて「南無アツバ」と唱えさせられているのかもしれない。

確りと手を繋ぎ合うぶどうの木

長命の家系に生まれ南無アツバ

かえ歌の賛美老若男女の和

三界に家なくてよし風の株

*幼い頃に心に刻んだメロディで、今アツバを賛美できる幸せ。

練馬区 魚住るみ子

口遊む夕焼け小焼け南無アツバ一日の終りを感謝しまつる

生かされて余生の祈り常住坐臥一生の畢りを感謝しまつらなむ

卒寿なる夫へ塗箸春爛漫

*ご夫婦の変わらぬ愛情。余生」を心から感謝できる幸せ。

文京区 大木孝子

ひと汝を大工と呼べり梅の花

形代にうすうす骨の見え来たる

水蜜桃一日を神のごと眠る

* 野守「通巻40号より。神のごと」きとはどんなものか、水蜜桃」のごとき甘い眠りか。

名古屋 片岡惇子

昭和つなぐ枇杷鈴なりに祖母の家

七変化アツバの中に心無き

梅雨晴間ペトロとパウロの心読む

静寂を切り裂き滝の止めかな

* 心無き」この場合は、無心ということか。聖なる闇——無としての神を思わせる。

大和市 佐藤悦子

悩むなと呼びかけてくるみ言葉よ濡れて佇むアジサイの花

なつかしく金祝の記事読みたれば思い起こせりルツ記二・二〇

主は守りわたしの足を堅く立てねむることなくまどろみもなし

聖霊降臨の日は、特に足の痛みがひどく、一日外出できず、夜一人でなんとなくN響アワーを見ていました。すると字幕に、メンデルスゾーン作曲、組曲エリヤから合唱、東京芸大合唱団、

主は苦しむあなたを見守っている……

ねむることなくまどろむこともない

と、くり返し、くり返し流れてきました。私はしだいに画面に引き込まれていき、これは隣み深い神さまから私への慰めの言葉だと気づかされて、いたく魂に響き、忘れられぬ貴重な体験となりました。後で調べる

と詩編121からの言葉でした。

豊田市 佐藤淡丘

百合活けてすこしずらしぬマリア像

あじさるの斜面ほどよき雨の中

水鏡帰燕近しと水敲く

手を容れて届かぬものや木下閣

俳句は一神教に耐えられるだろうか。」との命題を、ぼんやり考えていた時代が長く続いていました。今回本誌 174号の主筆、小講話 求道詩歌のすすめ」を読んでいて、はっと、これでもいいのだ」と気がつき元気が出ました。そこには井上神学の基本的考え方、

洗在神論」ペンエンテイズム」が述べられ、

歌道や俳句道との相性は、キリスト信仰のなかで抹殺されることはなく、むしろ息を吹き返すことができるのだと、ハッキリ述べられておりました。今朝も丘に登り若葉をたたいて主を賛美して、イザヤ書を反芻しました。由と丘はあなたたちを迎え、歓声をあげて喜び歌い、野の木々も手をたたき」 55・12」と。南無アツバ、南無アツバ。

*テレビアやフランシスコの霊性を学ぶとき、詩歌は

自然と神の関係を素直な心で取り結ぶ絆のようです。

立川市 新堀邦司

郊外に集ふ家族や昭和の日

法学士老いけり憲法記念の日

新任の若き牧師や復活祭

* 日矢」6、7月号より。ご自身やご家族のことを読み込んだ句から、しみじみした感慨を共有できます。

一宮市 西川珪子

祭壇にバラいっばいのミサ進む

風誘ひたんぼの絮中空へ

新緑の下に寂かに眠る古葉

祈るほど蜜袋の白輝き

*蒸し暑い日が今しばらく続きますが、ちよつと庭を見れば、緑がぐんぐん濃くなつていく。命なりけり。

薬野市 長谷川末子

紫陽花の下に隠れる幼き子

父の日の桃の滴り手も舐めて

蛇莓刈り残したる清掃日

プラタナス

冬の間は丸坊主さぞ寒かろう寒かろね／春の恵みに芽が生えて／ぐんぐん伸びて夏となる／台風きても逆らわず葉裏を見せて右左／日暮れとなれば小鳥の啼／晴れても降っても小鳥のお宿／真夏の道に葉影を広げ／誰もが通る片道を／すべて御神のなざる慈悲

*四季のめぐりの中での喜怒哀楽。まことに単純なことですが、このリズムから抜け出ることばできません。

高校倫理「キリスト教」授業録5

前回162号の続き——マルコ10・17、31

この「金持ちの男」はある意味でほかたち人間の代表といつてもいいんじゃないかな、と思えてくるんです。そこで、「善い先生」という彼の呼びかけに対して、イエスが「わたしはそういう者じゃないよ」ってかわしたのがジャブだと思えば、二〇節、彼が、「先生、そういうこと（掟）はみな、子供の時から守ってきました」と胸を張って答えたのに対して、今度は二二節、イエスが、「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物売り払い、貧しい人々に施しなさい」というのは、ノックアウト。つまり、「金持ちの男」の「おれ」意識＝自我（自己）中心性をイエスがたたいた、ということじゃないだろうか。

でもね、「金持ちの男」に意地悪したんじゃないと思う。それは、二二節の「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた」という言葉からも明らかだ。この男を思いやって、彼の「おれ」意識、自我にジャブをかまし、ノックアウトしたんだと思っんです。そういうふうには、ほかはこの話を読んでいます。

七 「おれ」意識——自己中心性の問題

ほかたちはいつも、なにかにしばられている感覚とか、将来への不安、そういうものから自由になることを願っていないかい。どんな高尚な哲学を持ってきてもこの現実が否定しようもない。

△その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんのお金を持っていたからである。▽（二二節）この話でイエスは、結果的に彼を突き放したように終わっているけど、そうじゃないと思う。「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた」（二二節）という言葉には、この男はけっこう財産を捨てられないだろう、ってことをイエスが十分承知していた、というニュアンスも含まれているんじゃないかな。それでも、この男に自分の「おれ」意識に気がつかせる必要があった。そうしなければ、この人にほんとうの幸せはない、そう思っただろうね、イエスは。この男が無意識にこだわっていた「おれ」意識。それは、「財産を捨てろ」といわれて、やっぱり「捨てられない」財産へのこだわりとして顕在化（表面にあらわれること）、意識化された。気づかされた。（つづく）

*原稿採否主筆一任*締切日毎月末必着*年会費二千円（送料共）*郵便振替口座 〇〇一七〇一三二六〇九〇九 平田栄一*投稿先 お問い合わせはメールで*ブログ「南無アツバを生きる」